



嬉泉の新聞 第70号 2014年（平成26年）10月発行

発行＝社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156-0055）TEL 03-3426-2323

<http://www.kisenfukushi.com> E-mail : kisen@kisenfukushi.com

## 「石井先生が後に続く者のために熱く語った理念、方法、組織運営」

社会福祉法人嬉泉 理事長 須藤 祐司  
医療法人社団嬉泉会 理事長

石井先生の色紙に「福祉施設処遇は人間の善意と技術の集積による」と言う金言がある。正にその言葉は石井先生の全てを表しており、その言葉の具現化のために、先生は実践と研鑽に生涯を捧げた自閉症の先駆者であった。

特に平成25年1月中旬に開催された嬉泉恒例の年頭所感会では先生から嬉泉の将来に込められた熱いメッセージが伝わってきた。

この会は全職員が一堂に会して先生から直接講話を頂ける緊張と期待の交差する感動、感激の機会にもなっている。

先ず小生は、その年の講話には特段の印象を受けた。それは例年に増して石井先生の顔貌が精悍で姿勢は凜とし言葉にも活気と生氣と迫力が満ち溢れていたからである。

主旨はこの数年間繰り返し述べられていた重点項目ではあるが、この度は、特段声高に以下に記述した法人の理念等を強調された。

冒頭、嬉泉の特質は利用者援助に関する理念 (mission)、方法 (method)、組織運営 (management) という「3つのM」にあると述べられた。

I 理念としては、困難な利用者に関わる勇気と情熱を持ち、その基本は限りなく社会的共生を願う心であり、人を信じ合う立場にたち、自助努力で自己のスキルアップに努

め支援者としての責任を執る自覚を持ち相互的な学習の下に新たな有力な同僚を増やすよう努めること。

II 方法として「受容的交流」を基軸として、より多くの有益な方法の取り入れに努力し、特に強固な行動障害や、行き詰まる家族関係に積極的に関わり、又社会的に放置されやすい就労困難な人へのたゆみない試行錯誤的な支援を重ね、家庭で安心が得られない人に対しては、社会と同様な生活ができる施設の生活の改善を求めていく。

III 組織運営としてはより新たな地域開発事業を興していく。そのためには、施設長及び主任者の運営主体性を求め、より多くの職員の協力関係、組織的活動の習熟に関わる研修機能の一層の充実と、外部研修機会を多く受けられるように考慮していかたい。更に諸施設における職員の有利な生活改善や、支援しやすい環境の整備に努めたい。と述べられた。

我々、後に続く者はこのメッセージを心に深く刻み、石井先生の築かれた嬉泉の仕事をしっかりと受け継ぎ護る覚悟で協力し合い一丸となって頑張って参りますことをご謹前にお誓いするものであります。

# 前常務理事 石井哲夫 を偲ぶ

平成26年5月28日、

当法人 前常務理事 石井哲夫が逝去致しました。

6月21日には、青山葬儀所にてお別れの会（法人葬）を執り行いました。多くの方にご参列いただきましたこと、謹んでお礼申し上げます。

今回の「嬉泉の新聞」は、故人に所縁のある方々からいただいた追悼文を元に構成し、在りし日の故人を偲びたいと思います。



## 上司と父親の間

社会福祉法人嬉泉

常務理事 石井 啓

私にとっての石井哲夫は、第一に父親である訳ですが、同時にこの嬉泉という職場での直属の上司でもあり、特にここ20年余りは、家族としてよりも、仕事の場で顔を合わせることの方が多いつたと言つても過言ではありませんでした。それは取りも直さず、故人が仕事に打ち込み、公私の別なく自閉症の人たちと関わってきたことの証に他ならない訳で、故人の人となりをご存知の方には、「さもありなん」と首肯していただけると思います。

上司としての父は、仕事に対しても厳しい人でした。当たり前ですが息子としての甘えなど許されず、むしろ人一倍厳しく評価され、殆ど誉められた記憶がありません。親子で同じ職場に居る手前、ということもあったでしょう

最後の入院の直前、病床でのことでした。父は私に「お前は、俺の気持ちをいちばん受け継いでくれていい」と言つてくれました。涙が出ました。人の気持ちを大事にするということを信条としてきた父の口から出た、私に対する最大の賛辞だったと思ひます。この一言で私は救われ、大袈裟に言えば自分のこれまでの人生が肯定

し、私も自分なりに嬉泉で働くに当たっては、内外から厳しい目を向けられることを覚悟していましたので致し方なかつたですが、それでも「キツイなあ」と思うこともしばしばでした。そんなときに父から労わりの言葉でもあれば救われたのですが、男同事の照れでしようか、面と向かってはついぞ聞かれることはありませんでした。尤も、そうした労いの言葉が掛けられていたとしたら、私自身それに甘んじてしまつたかもしれないと思うと、悔しいですが、父の私に対する態度は正しかったのかもしれません。

された思いがしました。  
この言葉を礎に、父の残した嬉泉を私なりに守つていこうと、決意を新たにしています。

## 嬉泉の歴史

社会福祉法人嬉泉理事

療育・保育統括アドバイザー

山根 美江子

昭和40年に子どもの生活研究所を開設し、翌年社会福祉法人の認可を受けた「社会福祉法人嬉泉」の成り立ちの原点は、原宿にあつた日本社会事業大学の石井研究室でした。私が研究室に押しかけたのが昭和34年で、この時すでに子どもたちの外来相談を中心に、三才児の生活グループや、緘黙や吃音等の問題をかかえた子ども達の継続指導が行われていました。これなどは学生が臨床を体験し学ぶ場となっていました。その他、定期的

に外林大作先生を囲んでサイコードラマ研究会が開かれたり、夏には子ども達を連れて、戸田（静岡県）の海で合宿が行われ、いろいろな取り組みがなされていました。

その一方で大学の研究室としての仕事は、時間的にも経済的にも、場所的にも限度があり、本当にしたい事を十分にできる場がほしいという願いもありました。この願いを当時、石井先生が講師をしていた日本女子体育専門学校（現、日本女子体育大学）の授業を聞いた学生が父親に話したことがきっかけとなって、石井先生と初代の理事長、須藤晃弘氏との出会いが実現しました。この時、須藤氏から、千歳船橋に所有していた石塚園の広い庭と、木造二階建の日本家屋が寄贈されました。

子どもたちの生活研究所は、この木造の建物と、門を入つて右手にすこやか館と名づけられた保育の場を、木造二階建てで新築して、昭和40年4月18日に開園式をむかえました。各新聞が「民間で初めて第二種自閉症児施設として認可を

の自閉症療育の場が誕生」と報じていたのを記憶しています。事業は、それまで日本社会事業大学において実施してきた、子ども相談を発展させ、障害児のための相談事業を加え、「保育・療育事業」として次の三つの学園を設置し、開設されました。すなわち、幼児保育の場としての「すこやか学園」、自閉症児のための「めばえ学園」、知的障害児のための「こぐま学園」です。特に自閉症児への療育は、石井先生を中心として開拓的・実験的使命をもつて取り組まれ、発展させてきました。

その成果は、昭和41年1月に「子どもの生活研究所 年報No.1」が発行され報告されています。その後、初代理事長、須藤晃弘氏から、千葉県袖ヶ浦市の八万二千m<sup>2</sup>の土地の寄贈を受け、その第一歩は昭和52年12月に精神薄弱児施設「袖ヶ浦のびる学園」の認可を受け、そこで行われていた自閉症児への早期療育についてはNHK教育テレビ「子どもの発達相談」によって全国的に紹介されました。

平成11年には現在の建物に改築され、同時に世田谷区の認可保育所「すこやか園」と知的障害者通

所更生施設「おおらか学園」が開設され、この頃より地域のニーズに積極的に対応しながらの事業展開が進められていきました。板橋区立「赤塚福祉園」は、平成5年の受託ですが、その後、しばらくたって「東京都発達障害者支援センター」、「世田谷区発達障害相談・療育センター」の受託をはじめとし、「清瀬市子どもの発達支援・交流センター」、「大田区立こども発達センターわかばの家」等の受託が続きました。

事業とは別に法人には研修部門が設置されており、当法人の中心的な課題である研修に関して、各事業間にまたがるスーパービジョン体制を整え、交換研修や合宿研修等を行い、法人がセンター的役割を果たし、外部にも嬉泉主催のセミナーを開催し、積極的に発信してきました。

事業とは別に法人には研修部門が設置されており、当法人の中心的な課題である研修に関して、各事業間にまたがるスーパービジョン体制を整え、交換研修や合宿研修等を行い、法人がセンター的役割を果たし、外部にも嬉泉主催のセミナーを開催し、積極的に発信してきました。

の受託ですが、その後、しばらくたって「東京都発達障害者支援センター」、「世田谷区発達障害相談・療育センター」の受託をはじめとし、「清瀬市子どもの発達支援・交流センター」、「大田区立こども発達センターわかばの家」等の受託が続きました。

## 自閉症の人々を こよなく愛した

**石井哲夫先生を偲んで**

一般社団法人日本自閉症協会

成25年4月、「児童福祉の父」と言われる石井十次先生の名前を冠した賞を授与されたことを、先生はことの外に喜んでおられました。

意見がある中で、先生はまさに「信念を貫く」という姿勢を堅持されました。

私たちには、先生のお考えや実践的姿勢を踏まえて、一般社団法人日本自閉症協会の活動にますます

先生は、自閉症の子ども達のあり方を理解して受け入れる、すなわち「受容」と、私たちが子ども達のためになるようにかかわる、すなわち「交流」を重視した「受容的交流療法」の理論化と実践に努められて来ました。この受容的

交流の哲学はなかなか理解されず、しばしば誤解されることもありますが、先生は泰然自若として信念を貫かれました。最近、さまざまな療育指導技法やプログラムが注目されておりますが、どのようなアプローチであっても、その基本に深い人間理解、すなわち「受容的交流」の考え方がなければ、形式的、マニュアル的なものに終わるでしょう。

石井哲夫先生、本当に有り難うございました。

その後、お会いする機会が増え、時には国際会議にも一緒にいたしました。とくに昭和59年からはじめた「嬉泉・自閉症実践療育セミナー」では、先生と共に企画を立て、自閉症に関する実践と研究について真剣な議論が展開されました。このセミナーは毎年開催されていますが、「実践」というキーワードは、石井先生のお考えの基盤にあるものと思います。平



石井所長と山崎会長

## ★石井先生との思い出

一般社団法人日本自閉症協会

前副会長

社会福祉法人けやきの郷

理事長 須田 初枝

石井先生を偲ぶ会に、親として

誰よりも出席しなければならない

私ですが、健康上の都合により出席することが出来ず、本当に残念で、先生には心からお詫び申し上げます。

私は、昭和42年に、自閉症児親の会を、自閉症の子どもをもつ母親を中心に設立した一人でしたが、当時は、会合を開くにも場所もなく、自閉症の大変な子どもを小脇に抱えて、東京の役員の家を転々としながら、会合をもっておりました。

そのことをお知りになった石井先生が、日本社会事業大学の相談室を、ご厚意で使わせて下さったのが、私が石井先生にお会いしたはじまりでした。

先生は、心理学者として、自閉症の療育の研究をなさつております。した。

いま、振り返って思うことは、

先生の心を捉え、魅せられて愛された自閉症の人たちを、最後の最後まで心配して下さつたことを、親として心より感謝しております。

お亡くなりになる前日の夜にも、発達障害者を支援する発達障害者議員連盟副会長であられる衆議院議員の野田聖子先生に、ベッドの上からお電話をされ、自閉症の人たちのことを、長い時間、お話ししておられたそうです。

先生の自閉症に対する療育の中である「受容」の考えは、自閉症療育の基本であると、私も考えております。

このことを、どう捉えるかが問題で、私は、よく先生と意見の異なることもあります。親としての思い

をぶつけあうことのできた唯一人の親ではなかつたかと思つております。

しかし、一番、お互いの心の中を言い合えたことは、最高のお付き合いをさせていただいたとも思つております。

お亡くなりになる半月ほど前

に、ご自身のお体の具合も思わしくないのに、私の病気を心配して

下さるお電話をいただき、「須田さんの元気な声で安心したよ。ぼくも元気をもらつたよ。」と、声と声の対話をしたのが、最後のお別れでした。

先生のご訃報に接したとき、私は、私の主人が他界したときの気持ちとはまた異なる悲しみを感じました。

私は、いま、自閉症専門施設「けやきの郷」の理事長をしておりましたが、皆さんに伝えたいことは、45年間にわたる、血の滲むような

私は、まだ頑張りますので、どうかややきの郷の見守つていてください。お願ひいたします。

45年間にわたる、血の滲むような親の会・協会の活動で得たものを、お安らかに。

このことを、どう捉えるかが問題で、私は、よく先生と意見の異なることもあります。親としての思いをぶつけあうことができた唯一人の親ではなかつたかと思つております。

私は、いままでの親の会・協会の活動の中で得た、私の理念に沿つた自閉症の人たちの人生を、「けやきの郷」に残していくたいと思つて努力しております。

私は、いままでの親の会・協会の活動の中で得た、私の理念に沿つた自閉症の人たちの人生を、「けやきの郷」に残していくたいと思つて努力しております。

私は、いままでの親の会・協会の活動の中で得た、私の理念に沿つた自閉症の人たちの人生を、「けやきの郷」に残していくたいと思つて努力しております。

私は、いままでの親の会・協会の活動の中で得た、私の理念に沿つた自閉症の人たちの人生を、「けやきの郷」に残していくたいと思つて努力しております。



## ★石井哲夫さんの

### 逝去を悼んで

社会福祉法人東京福祉会

専務理事 吉岡 則重

私が都の障害者部長のときに頭

を痛めたことの一つか、障害者

施策も縦割りの弊を免れないこと

で、身体障害や知的障害に比べ、

自閉症や精神障害の方のための福

祉施策が大分見劣りすることでした。

そんなときに相談したのが石

井哲夫さんで、職員とともに子研

を訪れ、子供と接している実際の

場面を拝見しました。その後の

ディスカッションでは、一人ひと

りの存在をあるがままに受容する

ことの大切さや難しさ、長い時間

軸で構えること、援助技術確立の

必要性などに話が及びましたが、

加えて石井さんやスタッフの皆さ

んが大変に熱心に取り組まれてい

ることや研究意欲の高いことに感

銘を受けました。

そこで、私たちは、こういう所

が拠点になるべきだ、そして東京にこういう場をもつと増やしていく」と考えたのでした。

その後の歩みも遅々たるもので

すがトスカ（東京都発達障害者支

援センター）につながります。嬉

泉は、間違いなく東京の自閉症児

者支援の拠点です。臨床にこだわ

るというポリシーと東京全体を牽

引する役割は、時に相容れないか

も知れませんが、自閉症児者を援

助する技術を嬉泉で深め、これを

東京全体に広げていくという運動

論的な観点から克服していくか

ではないでしょうか。

実は、石井さんには保育でもお

世話をなっています。私が保育

団体との調整で苦労している時に

は、出張先の九州からわざわざ電

話をくれてアドバイスを頂きました。

誠実な臨床家でありながら理論

的にも卓越し、しかも現実的な

利害調整にも目配りのできる人と

いうのは珍しい。石井さんは、東

京の福祉の世界で稀有の存在でし

た。斃れる直前の理事会でも「もう少し頑張りたい」と語っておら

れた石井さんの姿は今でも鮮明

で、石井さんの生き方に接した者

のなかではこれからも生き続ける

ことでしょう。

石井哲夫さん、有難うございま

した。

石井哲夫さん、有難うございま

した。

## ★ぼくの遺言

日本社会事業大学

理事長 潮谷 義子

石井先生と私の出会いは、昭和三十七年日本社会事業大学入学と

共に始まりました。

長い年月は、紙面で収まりきれ

ない程の学びと思い出が与えられ

ました。感謝です。

先生の不肖の教え子として心深

く刻み、これからも大事にしなけ

ればならないと考えている事があ

ります。先生が御逝去される四日

前の五月二十四日、夕食と共にし

ながら交わした会話です。先生は

「ぼくの遺言」と表現されていま

したが、決して感傷的でも苦悩に

満ちたものでもなく実に淡淡とし

て先生の過ぎ越し方をお話し下さ

いました。まず口にされましたこ

とは、「私なりに自閉症の人達に

きちんと対応して人生を終りたい

と願っている」ということでした。

「きちんと対応していく為の理

論として先生がお考えになられた

事の一つに、これからテーマに

愛着臨床研究を深め、その必要性

を重視したいとの思いを述べられ

ました。

先生の生涯は、誰も理解しよう

としなかつた自閉症を理論と実践

から一人の存在として認め、受容

し交流され続けた歩みでした。静

かに語られた「受容とは…」の内

容を私なりに理解したことは、「自

閉症の人達の態度や行動を容認す

ることではない。人格を尊重して

人の内面にある精神的・心理的

な働きが脳の中枢機能障害と併せ



## ありがとう 『ございました』

社会福祉法人あかりの家

施設長 三原 憲一

行動に表現されている。彼らの側から事象を把握していくことが支援の第一歩。受容は彼らの生活の過程に人間的な心情が育まれていけるように心のケアを心がけていくことにある。」と教えられたと思っています。最後の語らいから私が学んだことでした。

今日、盛んに言われている共生社会の実現にも、社会福祉実践者が人間同士の思いやりを重視し自分が相手のためになっているかを常に問いつつ支援していくことを忘れてはならないと静かに語りかけられました。

あらためて、二度と得ることの出来ない深い学びの時であつたことに感謝しつつ、先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

「私の施設経営戦略は、有能な人を集め、他では敬遠する困難な仕事に挑戦するということにつきる。」『経営協・論点』で述べられた先生の、この痛快と言える程に言い切られた（思いと強さ）の文面に触れた瞬間、私の心は直立不動といった感じでした。それから

毎年、当園の4月1日全体会で読ませて頂いています。

私の「考えるヒント」ノートには、現実の上に立つて現実を切り拓いていかれた、先生のメッセージ

白梅学園大学  
教育・福祉研究センター顧問  
元白梅学園短期大学教授  
村田 保太郎

## その“やさしさ”が 好きだった

れ、私には、見方や方向を示し整理して頂いた、大きくて重く、幅の広い先生でした。

「今日三原君元気がないみたいだね」。人づてに聞いた先生の気遣いのお言葉、ありがとうございました。見守って下さい。

帰り道、二人はそのショックでほとんど無言のまま別れた。その後、一ヶ月程たつて石井と会う機会がもてた。「ぼくは、平井先生の姿が焼きついてしまい、三週間ほど食事がのどを通らなかつた」と語り、「あの時逢つておいてよかつたよね（平井は七月七日死去した）虫の知らせっていうのかも」としみじみと話した。私はとくと、大きな衝撃を受けたが、『食事がのどを通らない』ということはなかつた。石井の話に、『本当に心底やさしい人』だ、大きな仕事をこなし、それでも「ぼくは、仕事をこなした方が体の調子がよい位だ」と話すのを聞きながら、石井と比べて「己の恥しさに身の縮む思い』をしたことを思い出す。

平成十八年六月初旬、石井先生と二人で平井信義先生のお見舞いにいった。（以下、先生という敬称を略す）お会いしたその一瞬、平井の姿の変化に胸をつかれた。

平井の魅力の一つは、あの獨得のえも言われぬ、にこやかな笑顔”

であつたが顔は硬直し、青ざめて表情が全く消え失せていた。会話はあつたものの、表情に変化はなかつた。

石井も平井も恩師というか師弟という関係だつた。

私は、平井の研究グループで、教育・保育相談臨床や自閉症児治療等で四十年程の深いかかわりがあり、自閉症児を精神科医療から「教育・療育」の対象へという実践研究を続けていた。また、石井の研究グループとも交流があつた。石井が「嬉泉子ども生活研究所」を設立してからその交流はますます深くなつていった。

その後、石井は日本で初めての自閉症児の居住型施設「袖ヶ浦のびる学園」を設立し、村田は日本で初めて「自閉症児の学校適応」について「児童精神医学会」で発表し、更に学校に自閉症児の治療・教育を担当する教員と教室を作る働きかけをし、全国組織を作り立させた。これらは、平井・石井の存在なしには出来なかつたことであり、その点では三人は同志でもあつた。

ある人から「あなた方を三人組と言っている人がいる」と聞いた。平井先生とは亡くなる直前にお会い出来たが、石井先生は突然

いなくなつてしまつた。平井先生は八十七歳で亡くなつた。石井先生は普段よく「ぼくの方が二歳児貴だよね」と私に言つていた。私もお二人の後を近々追いかけそうだ。また三人で楽しい語らいをしたいのですね！

### \* ありがとう石井さん

一般社団法人

日本図書文化協会理事長  
筑波大学・白百合女子大学名誉教授

眞仁田 昭

石井さんに初めてお目にかかるのは、昭和三十四年のことであつた。ある著書の共同執筆者会議の折りのことである。その後は、氏の暖かな心配りがあつたからに違ひない。

その事業の推進に当たつては、熟慮して目標を定めると、従う職員を叱咤して前へ前へと進んだ人であつたと聞く。しかし、なお多くの職員が呼応して共に歩んだの

は、氏の暖かな心配りがあつたからに違ひない。

その石井さんが今年に入つて再び体調を崩された。三月の初旬であったか、研究所に見舞うと「こんなになつちやつたよ」と傍らの

石井さん、ご冥福を祈ります。

戻すかのように交流を深めることができた。

研究室が隣り合わせということも幸いした。週に一度の登校日、金子書房の若き編集者を交えての昼食会が毎度もたれたのである。その雰囲気はまことにのどかなものであつた。浮世離れした世界に心を遊ばせたといつてもよい。

そのような時間を重ねることでしみじみ思つたことは、「なんと人を思いやる心の深い人であるとか」ということであり、その思ふことを「それとなく律儀に動きに示す人」ということであつた。

しかし、五月二十三日、珍しく嬉泉の理事会・評議会を欠席。案じて二十五日の日曜日に電話をすると、「具合が悪くて」と付き添いの方。その午後、私が散髪で留守の時、氏から電話があつた。家内が応対したのだが、ところどころ支離滅裂なところがあつたと言ふ。その律儀さは終生彼の持味であつたと今にして思うのだ。その三日後の水曜日、袖ヶ浦でのケース発表会の席で氏の死去を知つた。

瞬間、「かけがえのない人を失つた」との思いが胸をよぎつたが、その思いはなお消えることなく胸中にある。有難い人に人生の晩年に巡り合つたものである。

酸素吸入器を引いて見せた。「石井さん、あなたは幾度となく難病を患つたが、それと戰う勇氣と不思議なほどよい医師に恵まれて、それを克服してきた。これからもそれを信じて」と励ましたことがある。

## 石井先生を偲んで

東京家政大学教授

増田まゆみ

石井哲夫先生との悲しいお別れから、三ヵ月余の時間が過ぎ去りました。こんなにも長く先生のお声をお聞きすることがなかつたのは、何年前かわからぬほど、私にとって、石井先生は、「保育」についての思いを聴いて下さり、何をなすべきかを導き、支えて下さる存在でした。

昭和四二年五月号の「保育の友」に、「なすことの喜び」と題し、「理論と実践の合致をめざした新しい臨床実践家の養成をめざすために、まず魄より始めよとの意気込みで、このすこやか幼稚グループをはじめたわけであった。日々の実践を通し生活に目標を見いだすことができるようになつたことは、座りながら考えていただけでは味わうことのできない『なすことの喜び』

と』の喜びがあつた。」と述べてあります。今、求められている保育者養成のあり方を、四七年も前から主張し、自ら行動し続けていらしたことにして、改めて先生の一貫した現場尊重の姿勢と質の高い保育者を志向する強い意思を感じます。

昭和四六年二月号の「保育の友」に、「精神障害児を迎える保育」と題し、「問題を持つ子どもを、深く理解することは、そこで子どもを直す原動力をもつたことになる。なぜなら、保育者とその子どもの心を結びつける回路ができる

こと」：保育所は、自分たちの生活の場として、子どもが多様な人間としての接触を経験する」と、障がいのある子どもと共にいる保育の意義を述べていられます。「性急に子どもを型にはめさせるよう

な保育にならざるをえない現実こそ問題視されなければならぬ」と保育の実態を理解し、最低基準三十対一という厳しい状況での保育実践者の努力を温かなまなざし

で認めつつ、保育の原点を示し、具体的にどのようにすべきかを提示するのです。

石井先生との思い出は何と言つても、「第一次保育所保育指針改訂検討会」です。「保育者主導の保育」から「子どもの主体性を尊重する保育・環境を通して行う保育」へと大きく転換しました。子どもの発達をどうとらえるか、保育の根幹に関わる検討の際、先生が、大人と子どもの関係性、大人が受容し、十分愛情をかけ、基本的信頼感を形成することの意味を熱く語つていらしたことです。

第二次改訂では委員長という重責を担われ、先生が強調していくとした家庭や地域を視野に入れた保育、子ども理解に基づく保育者の援助や専門性の向上が明記されました。

石井先生、心より、ご冥福をお祈り申し上げます。

石井先生、嬉しいご報告があります。先生と共に願っていた「保育現場と養成校が協働し、互恵性のある実習にしていくために、保育現場で実習指導する保育者の研



修（日本保育協会）が実現しました。保育者が反省的実践家として、学び・育ち続ける存在であるため、また、実習指導を担う保育者がより高い専門性を有する保育者として認められ、キャリアアップに繋がるはじめの一歩にしていくことを思っています。

石井先生の歩まれた長く、幾筋もある道、その中に私が共に歩ませていただき道での経験の知を大切にしつつ、私なりの新たな歩みを続けていきたいと思います。先生の遠い世界からの見守りのもとに…。

## 所長との思い出

利用者、保護者、元職員、現職員から

### ★石井先生の想いを

大切に

親泉会

保護者

田村 紀子

息子が嬉泉の療育を受け始めたのは中学生になってからです。石井先生のお話しを聞く機会は後援会の総会や父母会でしたので、私にとって先生の存在は雲の上の遠いものでした。

「ひかりの学園」の親たちが設立した「親泉会」の活動について、先生とご相談することが多くなりお会いする機会が増えました。いつもお目にかかる前はとても緊張しているのですが、お会いしてみると、不思議なくらい緊張が解けたお話をができるのです。

自閉症の人たちへの深い愛情と

色々な考え方を受け入れてくださいました。  
どうとう、先生とのお別れの日が来てしました。  
大きな支えを失った思いは「悲しい」とか「淋しい」とかの言葉ではとても言いつくせません。

最近、何かにつけ「先生はどうお考へになるかしら」と自分の中で先生と対話していることがあります。

これからも、先生の想いを大切にして子供たちのための活動をしたいと思います。



### ★永遠に私の心に

#### 生きる石井先生

社会福祉法人さがみ愛育会

理事長 小林 祐子

先生の訃報を聞きガクガク震えだに信じられない気持ちでいっぱい話しあい（飲み会）で〈関係保育〉

私が、難問に向かう際、新事業に取り組む際に先生にご示唆を頂き、取り掛かり進めてきました。

思ひ起こすと開設当初の子研で、あるがままの子どもを受け容れました。

私は石井先生の提唱する受容的交流法と基本的に繋がる理論であることを確認し感激していました。

未だに思い起こすのは研究所時代の日々です。昔の日本家屋の

〈あるがままの子どもを理論と実践で示されるバイタリティー溢れる圧倒的な存在感に凄い威力と言葉の重さに導かれ学ぶ日々でした。

た。

私事では石井先生と田辺先生とで子研で共に勤務の主人との結婚を進めて下さいました。社大で先生に学び、開設当時の子研に住み込み、自閉症児に日々向き合つた主人は、先生を東京の父と呼び慕い続けておりました。先生は生真面目で研究熱心な主人の生き方とリベラルな私とバランスがとれると思つて下さったようです。子研を離れた主人は障害児保育を保育界に誘導・確立させる為、〈関係保育〉とし実践理論を研究し続け、志半ばで病で逝つてしましました。存命中に先生との度重なる

はドラマの世界に巻き込まれて豊かな心地になつたものです。頭に手拭いを巻いた石井船長が次々に子どもの発想を展開させ、それぞれの思いが繋がり、広がり、深まる遊びの意味と大切な教えられた事は今も私の保育の原点になっています。夏の伊豆吉田のダイナミックな河童合宿、刈り入れの終わった田んぼや野山を駆け廻り修

業した忍者合宿、そして週一回の泊りでの石井研修、研修後の食事会での子どもを慈しむ言葉等、神

のような威光を放つ存在から人間味溢れる石井先生を感じられる時でした。今なお新鮮に私の脳裏に焼き付いています。

何度ももの病魔との戦いでも不死身だった先生、最後の最後までお仕事をし続けた先生、ゆっくりお休み頂きたいのですがそろはいかないでしうね。きっとそちらの世界にも先生を必要としている沢山の方々が大歓迎で待ち受けて、きつと休む間もない状態なのではないでしょうか。何より小林和雄が先生と一緒にやつて待っています。付き合ってやつて下さい。先生本当に有難うございました。永遠に私の心中で輝いています。



## 石井先生のお姿を

### 偲びつつ

社会福祉法人慧誠会  
帯広けいせい苑

総合施設長 村上 勝彦

最初の心理学の講義、響きのある声と明快な講義、四十九年前の石井先生が今も鮮明に思い出されます。

私は、三年の夏休み、児童養護施設でアルバイトをし、一ヶ月を経て、園長にそのまま務めろといわれ、それが同時に大きな挫折の始まりでした。子どもたちの心理状態を理解、把握ができず、関係が取れなくなっていたのです。四年になり、躊躇なく石井ゼミに入り、卒業と同時に子どもの生活研究所に就職させて頂きました。

## 石井先生へ

社会福祉法人嬉泉元理事

奥村 幸子

四度もの病魔との戦いでも不死身だった先生、最後の最後までお仕事をし続けた先生、ゆっくりお休み頂きたいのですがそろはいかないでしうね。きっとそちらの世界にも先生を必要としている沢山の方々が大歓迎で待ち受けて、きつと休む間もない状態なのではないでしょうか。何より小林和雄

が先生と一緒にやつて待っています。付き合ってやつて下さい。先生本当に有難うございました。永遠に私の心中で輝いています。

一九六九年（昭和四十四年）、研究は多様な事業展開をしていました。私は、相談事業と個別療育、才能保育、幼稚園の四歳児クラスを担当させていただきました。一九七四年（昭和四十九年）、

帶広で社会福祉法人慧誠会が開設しました。事業は、相談事業と障害児保育を併設した、まさに研究所の縮小型でした。

私が研究所にいたのは、わずか一年間でした。が、私にとつては濃縮された時間でした。この時間が四十周年を迎えて下さいました。もし石井先生に出会えなかつたら、私は今ここにいなかつたと断言できます。石井先生ありがとうございます。

わく、それが同時に大きな挫折の始まりでした。子どもたちの心理状態を理解、把握ができず、関係が取れなくなっていたのです。四年になり、躊躇なく石井ゼミに入り、卒業と同時に子どもの生活研究所に就職させて頂きました。

その頃よくケース会議や発達の勉強会をしました。ある土曜日の午後、定例のサイコドラマ研究会の最中に、「あられ」を手土産に突然いらしたのが、そののち社会福祉法人嬉泉の初代理事長になられた須藤晃弘氏でした。須藤さんがお帰りになつた後、十人ぐらいのメンバーで研究会を続けていた私たちのところに戻つていらした

れだけ驚かされてきたことでしょう。

う。

子どもが大好きで、子どもと接する大人に對して言い分を沢山持つていた私は、先生のなさるお仕事が大好きでした。良い学校に入れたいために子どもに知能テストを受けさせに来る親に疑問を感じた私は、先生は「でも、僕らがこれからずっと親と付き合っていくほうが子どもの役に立つと思うけどね」とおっしゃいました。それが「すこやか幼稚園」のきっかけになつたのですね。

んあつて世の為人の為に使いたい。どうしたら良いかと考へていた時に娘さんから僕の事を聞いたんだつて。それで、お金は出でど口は出さないから、僕にやつてくれないかつて頼まれたから引き受けた」とおっしゃいました。千葉大の時田先生や秩父学園の高橋彰彦先生など、みんなが唖然として「もつとよく考へて…。」と戒めたけれど「決めちやつたから…」の一点張りでしたね。

その後先生は「須藤さんは、お金は心配しないでとおっしゃつたけど僕がやりたい仕事は儲かるはずはない。僕は独立採算でやろうと思う。」とおっしゃり、今の子どもたちの生活研究所の敷地とそこに建つて純和風の家屋と改築の費用だけをいただいて、高い月謝と安い給料で「子研」が始まりました。コロニーのような構想を持つていらした須藤さんは、あちこち土地を探されて、千葉県袖ヶ浦に三万坪もの土地を買って寄付して下さいました。それが今のが行わされました。

びろ学園、ひかりの学園です。何という出会いだったのでしょうか!!

石井先生、もうすぐ私もそちらに行きます。先生と、須藤前理事長と一緒に思い出話を沢山したいです。待つて下さいね。楽しみです。

## 石井哲夫先生を

### 懐んで

社会福祉法人嬉泉 職員  
小野 双葉

石井先生との出会いは、私が社大一年生の時でした。

石井先生との出会いは、私が社大に「児童相談室」が発足し、当時は連日他大学の心理担当の先生方が集まつてこれら、「児童心理学・児童相談」とは、どうあるべきか等の意見交換が行われていました。関心をもつた学生達はマジックミラーを通してお話の様子を見て記録をとつていました。私だけではなく先輩達も石井先生を慕っていたのです。

私は社大を卒業してその後石井先生の許で児童相談室のお手伝いを行ってきました。その頃、幼稚園・保育園の園児に対しての知能テストが盛んになっていて石井先生への依頼が多くあつたのです。石井先生は学生及び相談室へ集まつてくる人達への指導の根底に「生活を共にする」ことへの気持ちが強くあつたと思います。学生時代からたびたび先生の家に泊まるさせていただき、夜を徹していろいろとお話を聞いたものです。その時の食事はいつもカレーで、皆で作りました。夏休み・冬休みの研修合宿も日常の指導の延長であったと思います。

石井先生は戦争中海軍兵学校（広島県）での訓練のご経験があり、海に対する思いは大変強かつたと思います。とても偶然のことでしたが、私が岡山で「いのちの電話」でご指導いただいた弁護士の波多野一二彦先生も海軍兵学校が同期でいらしたことから、お二人はお会いになり、波多野先生は嬉泉の良い理解者として親泉会でお世話になりました。

静岡県戸田海岸で旅館を借り切つての合宿には、下は三才から中学生まで参加し、高校生になつてお手伝い参加もありでした。その後同じ静岡県吉田に自前の合宿所を作る事ができ、冬も忍者合宿が行われました。

職員にとつても合宿は人間関係を身をもつて味わうことのできる良い研修の場でありました。吉田さんはご一家とも知り合い大変お世話になつてきました。その後故喜代さんご一家は石井先生の勧めもあつて袖ヶ浦にのびろ学園ができた時に移つてこられ、学園で働いてくださる様になりました。

生のお考えを常に支えていらした生前の恭子先生（奥様）は、やさしく色々な事によく気づかれる方でした。石井先生よりも早くお亡くなりになりとても残念でした。

私の石井先生の思い出は、わが息子直人へも伝わり、直人にとっても私以上に石井先生を尊敬し、人生の良き先輩、良き師であったと思います。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

### ★ 石井先生を偲んで

すこやか園・めばえ学園  
卒園生保護者 齋藤 弘子

次男の生後間もなく長男が自閉症と診断され、その時見たNHKの療育相談。「ここに通わせたい」と転居。長男は、めばえ学園、次男は子どものへや、通称「どらのこ」。三菱館での少人数保育を経験した最後の園児の一人で、石井先生のお孫さんの遙ちゃん、光なりました。

しゃんも一緒にでした。平成11年6月に今の園舎のすこやか園に移りました。園児は皆で「石井所長！」と呼びかけ、先生はいつも柔軟な笑顔でした。卒園後は吉田の学童合宿。石井先生は「かっぱ大王」になり、一緒に遠泳をして下さいました。当時の仲間は今も仲良しです。

すこやか園には、大人が喜ぶ形式美や集団行動を強要する運動会はありません。皆ありのまま。め

ばえ学園と合同のみんなで楽しむ会やもちつき。夏祭りにバザー。先生方は、急かしたり強制することなく、常に子どもの気持ちを尊重して下さり、そこにはいつも石井先生がいらっしゃいました。

幼少期にありのままの自分を丸ごと受容れて大切にしてもらえた事は、障害の有無に関係なく安心と自信を得たかけがえのない経験です。二人の息子を育てる指針は石井先生からの教えでした。二人とも、人の気持ちのわかる青年になりました。

石井先生に出会えましたが、私たち家族の幸せです。本当にありがとうございました。

「すこやか園」は私の原点です。先生方は一人ひとりと向き合つてくださいました。今でもすこやかの仲間は強い絆で繋がっています。今、私は社会福祉を学んでいます。自然とこの道を選んでいたのは、先生が導いてくださったのではないかと思います。石井先生とすこやか園に、少しでも恩返しができたらと思います。

所長、今までお疲れ様でした。本当にありがとうございました。



所長ともちつき

### ★ 所長！

すこやか園 卒園生 中杉 陽香

石井先生は、今までこれからも私にとって「所長」です。

所長はいつもやさしく大人気で、所長が来ると皆「所長！所長！」と喜んで走り寄りました。

サンタクロースに扮して楽しませてくださいたとき、私は所長だとわからず恐怖で号泣してしまいました。あの時はごめんなさい。吉田の合宿では、泳ぎのうまい所長

がどんどん先に行ってしまうので



所長サンタからプレゼント

## 吉田合宿の想い出

吉田合宿 参加者

濱本 麻子

私は原宿にあつた社大幼稚教室に通つていた縁で、夏はカツバ合宿、冬は忍者合宿と名付けられた吉田合宿に参加していた。

合宿は毎回違う物語が用意されていた。石井先生がカツバ大王に扮して登場し宝物を海賊から守つたり、道場主石井白雲斎のもと本格的にゲートルを脚に巻き忍者の修行をしたり、遊びながら様々な体験ができた。海では、泳ぎの得意な石井先生は頭に手ぬぐいを巻き付けて、いつも先頭になつて海に入られていたのが思い出される。小浜から向かいの平島迄泳げるようになりたくて先生の厳しい励ましを受けながら溺れる様になりましたが、らも泳いた。夜には提灯をさげて小川にホタル狩りに出かけたり、肝試しの途中でお墓からお化けが飛び出して合宿所まで逃げ帰つたことなど泣いたり笑つたりの想い出ばかりである。また、あ



夏の吉田合宿

の頃の合宿は自閉症の子供達も参加していた。子供だった私は障害のことは解らなかつたけれど、だからこそ同じ子供同士として遊

んだ。

このような経験が大変貴重な事であつたと大人になつてから感じる。石井先生には本当に感謝の気持でいっぱいである。

## 石井先生の想い出

ひかりの学園 利用者

市川 浩志

前はよく石井哲夫先生におせわになりました。

旅行にもいけるようになりました。

九州旅行、海外旅行は行けました。マレーシア、タイ、かん国、台湾とか、本当に行けてよかったです。

九州は枕崎の帰りに建昌保育園に行けてよかったです。

串本、亀山、鳥羽、枕崎、入間、下田にも行つた。

長岡、村上、寒い、いろんなところに行きました。

広島、岡山、沼津、福岡、久留米、熊本へといろんなところによつた。

吉田にも行けた。

作品を出してよかったです。

前はよくとびだしてました。

あはれたことがありました。石井先生のためにこれだけりっぱになりました。

大人になりました。  
前は家にいました。

前はよくわがままを言つたりしたこともありました。

もう人にめいわくはかけなくなりました。

石井先生には本当におせわになりました。

前は

### ◆編集後記

「嬉泉の新聞」第70号は『石

井哲夫追悼号』として発行いたしました。編集に携わった「嬉泉」の歴史の重みを深く受け止めると共に、様々な方との関わりの一端に触れ、それぞれの方々の熱い思いをより身近に感じることができました。

今後も職員一人一人が、石井所長の思いを繋いでいく事ができるよう、努めてまいりたいと思います。何卒、ご支援とご協力賜りまますようよろしくお願ひ申し上げます。

（田中（慶）、寺西）